「好き」とは言えない，それでも離れがたい

郷土愛だけでは捉えきれない地域ブランド価値の生成

― 西会津町・高知市土佐山地区における身体経験の質的研究 ―

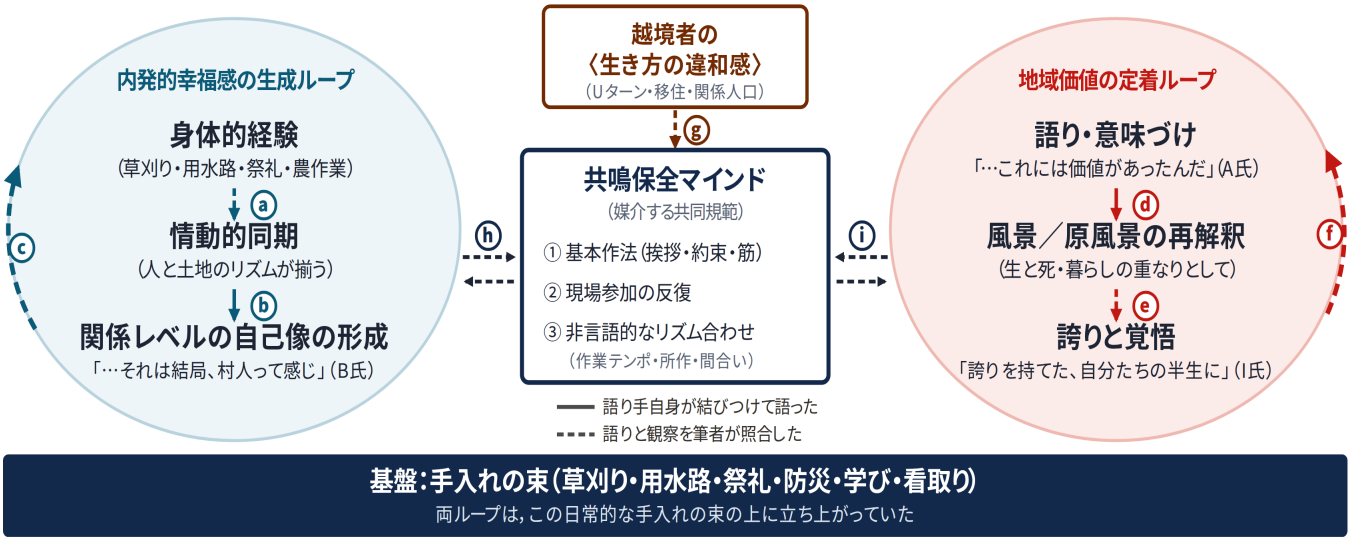
髙野 寛未　株式会社 NTT データ北海道／北星学園大学大学院 経済学研究科 修士課程修了（2026 年 3 月）

キーワード：プレイス・ブランディング，場所への愛着，身体経験，共同実践，場所の意味の共創

要旨

プレイス・ブランディング（PB）は，場所の意味が多様な人々のなかで共有されていく過程として捉えられる（若林ほか，2018，p.49）。本研究は，その共有を住民の側で支える関わりに着目した。福島県西会津町及び高知市鏡川流域／土佐山地区では，誇りや楽しさと，しんどさ，義務，次世代を縛りたくない思いが重なりながら，草刈りや用水路の手入れ，祭礼が続けられている。こうした手入れを支える，誇りや葛藤を伴う人・場所との関係の引き受けを，〈引き受け型愛着〉として捉える。半構造化インタビュー8 名，現地訪問・参与観察等 25 件（2021 年 1 月～2025 年 11 月※）の記録をもとに，身体的経験，経験の語り直し，迎え入れの共同規範〈共鳴保全マインド〉の関係を二重ループとして解釈した。身体性や日常実践は既存研究でも扱われている。本研究は，葛藤や義務を含む手入れにおいて，身体的経験と語り，関係や規範がどう結びつくかを具体的に記述し，場所の意味の共創を捉える視点を提示する。

二重ループとその媒介　関わりの持続を読み解く解釈モデル



身体的経験・語り・共同規範の関係から，地域への関わりの中で何が起きているかを問い直すための見取り図。実線＝語り手自身が結びつけた関係，破線＝語りと観察を筆者が照合・統合した関係。実線も因果の実証を意味しない。循環全体の反復は追跡課題。詳しい読み方は第 4 節，矢印 a～i の根拠は第 6 節を参照。

※分析した記録（インタビュー8 名，現地訪問・参与観察等 25 件）は 2025 年 11 月まで。ポスター掲載の裏山コーヒーの写真（2025 年 12 月）は、E 氏が語った実践（修論 p.47）の様子を示す参考写真であり、上記の分析対象期間には含めていない。

引用は，対象者確認（合意）を経た三次ファイルに基づく。筆者による要約はその旨を明記した。無断転載はご遠慮ください。

1.関わりの持続を捉える視点とフィールドの声

〈引き受け型愛着〉（暫定概念）

誇りや楽しさと義務・葛藤が重なりながら，その場との関係を引き受け，共同実践を繰り返すあり方。好意や満足だけでは説明しきれず，制約とも併存する。

既存の愛着概念から独立した尺度・類型の確立を主張するものではない。

語りから読み取れること	なお残る別の説明
関与を尊厳や人生の肯定に結びつけている	義務感や役割期待も併存しうる
守りたいものの価値を探し直している	居住・経済・家族上の制約は排除できない
自分の関与と次世代の選択を分けている	本人が続ける理由の全体は確定しない

関わりの持続を考える 5 つの着眼点

1. 共同実践と感じ方の変化：手入れの経験と，他者や場所への感じ方の変化を捉える
2. 一緒に行う中での調整：意見の一致だけでなく，関わりながら作法や役割を調整する
3. 防衛と開放：大切にする作法を守りながら迎え入れる。排除の可能性も残る
4. 語りが次の実践へ戻る回路：翌年の草刈り・祭礼への折り返しは今後の追跡課題
5. 越境者の違和感：違和感から生まれる問いが，地域との関係にどう作用するか

フィールドの声

「郷土愛って素敵だけど…そこをさらに掘ると，別に郷土愛じゃなくてもいいんですね…要は自分の尊厳とか…その奥底は自分の人生の肯定です。後付けてもいいから。」— Ｉ氏（高知市・土佐山地区）

「スタバでのコーヒーよりも今やってる方が，つまり消費社会から生産社会，創造マインドになった自分みたいな…」— Ｅ氏（西会津町）。
消費や参加にとどまらず，自ら手を動かし，活動を企画する側への変化と，地域の面白さ・愛着の生成が語られる（修論 pp.43-47，要約）。

「好きっていうのがわかんないんですよ。ただ，誇らしいと思ってたのは事実です。山奥の古いものがたくさんある家が誇らしいと。」— Ａ氏（西会津町）

「残そうと言って残せないですから。今の私の考えでは。そしたら，最後まで今いる人が最後まで幸せにというか，同じ行政サービスの町場と同じようなサービスを受けてもらって終わるのが一番いいのかな。」
— Ｃ氏（西会津町・集落支援員）。「集落の看取り」をこう語った

「うちの集落が現代社会的になくしちゃダメだって理由は見つからなかった。…誰かが残すべきだって言って残すんじゃなくて，俺が残したいから残すしかないっていうこともよくわかった。」— Ａ氏（西会津町）

「自然環境とかそういうこと，環境が原料」— Ｈ氏（高知市・土佐山地区）。地域の原風景を，景観ではなく生きるための資源として語った

2　先行研究の到達点と本研究の位置づけ

本研究は，場所を人々の関係や実践から捉えるプレイス・ブランディングの視点と，修士論文で用いた身体的経験に関する議論を基盤とし，誇りや楽しさに加え，義務や葛藤を抱えながら地域に関わり続ける経験に着目した。

その貢献は，共同実践における身体的経験，経験の語り直し，迎え入れの共同規範が，地域との関係を引き受けるあり方にどう結びつくかを，二地域の語りと観察から具体的に記述した点にある。二重ループは，これらの関係を問い直すための見取り図として提示する。既存の愛着概念とは独立した類型の確立や，循環全体の因果関係を実証したものではない。

下の表は，修論で用いた主要な視点と，それを通じて事例から示したこと，本発表での整理を対応づけたものである。

修論の視座と文献	修論で用いた視点	事例から示したことと本発表での整理
プレイス・ブランディング 若林・徳山・長尾（2018）；和田ほか（2009）	PB を「”分節された意味の空間”であるプレイスが多様な人々の中に，高い密度で共有化されていくこと」と定義する（若林ほか，2018，p.49）。地域ブランド化を「この地に住みたい」というニーズに根差したアイデンティティ形成として捉え（和田ほか，2009，p.3），地域での感動が深いほど人々は愛着をもち，住民と来訪者がブランド価値を共有する関係が生まれるとする（同，p.150）	その共有化が住民の側でどう支えられているかを，身体経験と，その経験の語り直しから捉えた（ポスター①の問い，⑧の結論）
場所への情愛と内発的な関わり Tuan（1974）；Relph（1976）；Ryan & Deci（2000）；金（2021）	場所への情愛（トポフィリア）。暮らしの実践のなかで場所に巻き込まれていく実存的内側性。自律性・有能感・関係性の充足が内発的な関わりを支えること。特定の他者との関係のなかで形づくられる関係レベルの自己像	「好きとまでは言えないが，離れがたい」感覚を，快楽的な満足ではなく，誇りや覚悟，すでに土地に巻き込まれている感覚として記述した（修論 4.4.1）。本発表ではこの関わり方を〈引き受け型愛着〉と呼ぶ（②）
身体と語りによる意味の生成 Merleau-Ponty（1964）；McGann（2014）	Merleau-Ponty（1964）の知覚と意味に関する議論を踏まえ，修論では，語りを身体経験を掬い上げ，編成する営みとして位置づけた。McGann（2014）の議論は，主体と環境の相互作用から意味や価値を捉える視点として用いた	修論 2 章で理論から想定した「共鳴―物語―手入れ」のループを事例と照合し，「身体でわかる循環」と「言葉になる循環」が手入れの束の上で行き来する解釈モデルに整理した（③二重ループ）
地域をこえる関係と迎え入れ 徳山・長尾・若林（2017）；長尾・山崎・八木（2020）；Oldenburg（1989）	瀬戸内ブランドの事例から，センス・オブ・プレイスが言語化・共有されていくことで，行政単位にとらわれない広域の PB も展開しうることを示唆する（徳山ほか，2017，p.182）。地域間の PB（IRPB）において，地域ブランド資産を認識した個人が地域間のつながりを方向づけ・意味づける存在となりうること，専門性をもつ外部のアクターの誘引がその個人の孤立を克服させることを示す（長尾ほか，2020，pp.28-29）。家と職場の外にあり，肩書きから解放される第三の場（Oldenburg，1989）	越境者が持ち込む違和感と，挨拶・約束・筋などによる迎え入れの共同規範（〈共鳴保全マインド〉）を示した。肩書きを脱げる一方で，共同作業と作法を伴う場を〈責任を伴う第三の場〉と呼んだ（⑦）

本発表で加えた位置づけ（修士論文の提出後）

鈴木・藤井（2008）は地域愛着を「選好」「感情」（嗜好を越えて離れがたく感じる程度）「持続願望」に分け，とくに「感情」が地域活動への態度と最も強く相関することを示した（pp.359-360）。修論の「好きとまでは言えないが，離れがたい」感覚はこの区別に重なり，〈引き受け型愛着〉はその中身を語りと観察から捉えるものと位置づける。身体的経験としての PB 論（Eshuis & Ripoll González，2025）や，よそ者の受容段階の研究（長尾ほか，2018）は修論で参照しておらず，今後の接続先とする。

3　方法と倫理　共同規範と場の捉え方

項目	内容
フィールド	福島県西会津町（奥川地区ほか）／高知県高知市 鏡川流域・土佐山地区
期間	2021 年 1 月～2025 年 11 月
半構造化インタビュー	8 名（西会津町 5 名・土佐山地区 3 名）。このほか西会津町で聞き取りを実施
現地訪問・参与観察等	計 25 件（現地訪問，共同作業への参加，ミーティング，オンライン対談の視聴を含む。内訳は均質ではない）
データ管理	逐語録から本人特定情報を除去した二次ファイルを対象者へ返送し，使用合意を得た三次ファイルのみを分析・公表に用いた。逐語（データ）と筆者の要約・解釈を区別して表記

〈共鳴保全マインド〉と〈責任を伴う第三の場〉

語り手（B 氏）が「村人防衛マインド」と表現したものを，その機能面から筆者が名づけた語である（修論注 9，p.62）。〈挨拶・約束・筋〉という基本作法，現場参加の反復，非言語的なリズム合わせを通過基準として，受け入れの距離・役割・責任を調整する共同規範を指す。この規範が誰を暗黙裡に排除しうるかは，本研究では検討できていない。

越境者の語りでは，地域は肩書きを脱ぎ，自分らしい感覚を回復できる場として経験されていた（筆者はこれを〈責任を伴う第三の場〉と呼んだ。cf. Oldenburg，1989）。住民の側では，外から来た人が話を聞きに来たことが自信や誇りとして語られた（I 氏）。移住・越境経験者自身の語りと，住民が語る来訪者との交流は区別する。一時的な来訪者本人への系統的な調査は行っていない。

実務と学術への含意

実務　参加人数に加え，誰が・誰と・何を繰り返し，その負担をどう担うかを見る

学術　場所の意味の共創を，共同実践での身体的経験と，その経験の語り直しとの関係から捉える視点を示す（修論でいう「PB の内側化」）

4　二重ループの読み方と研究の限界

4.1　関わりの中で何が起きているかを問い直す

本図は，身体的経験，経験の語り直し，共同規範の関係に着目し，地域への関わりの中で何が起きているかを問い直すための見取り図である。他地域でも同じ順序や結果が生じることを前提とせず，それぞれの場所で何が重なり，何が異なるかを考えるために用いる。

その際，人や自然との関わりを，活動を継続させるための手段としてのみ捉えない。関わる中で，自分が何を大切にするか，何をしたいかが変わり，次の行為が生まれる可能性にも目を向ける。思いがけない出会いや自然の変化によって，活動の目的や関わり方そのものが変わる過程は，今後検討する課題である。

4.2　本研究で説明できる範囲

対象と一般化	二地域の探索的検討であり，統計的一般化は意図しない。提示した概念は当該事例に基づく理論的構成概念であり，適用範囲と境界条件は今後の検証を要する。
対象者の偏り	対象は実践の中核を担う人びとに偏り，離れた人，関与を控える人，批判的な人の視点は十分に捉えていない。筆者の共感的関与は，「誇り」や「覚悟」を肯定的に読み込みすぎる危険も孕む。
時間的な追跡	過去の変化についての回顧的な語りは得ているが，循環全体の反復を同一活動で前向きに追跡したものではない。資料に基づく過程の解釈と，今後の追跡課題を区別する。

上記は修論 4.5 をもとに，本発表の説明範囲を整理したものである。

4.3　図に描いていない関係と今後の追跡

- **語りや意味づけが翌年の草刈り・祭礼へ戻る折り返し：**理論上の検討課題であり，同一活動で翌年まで追跡して確認したものではない。回顧的な語りにある変化と，循環全体の反復を区別する。

- **手入れの束と両ループの関係：**両地域の事例を統合した解釈（修論 4.3.2）。C 氏の食事・受入れ負担や運営上の工夫（pp.34-35）も踏まえ，身体的経験や規範だけで継続を説明しない。

5　今後の課題

今後は、今回十分に捉えられなかった，活動から離れた人や参加を控える人の経験も含め，地域への関わりとその変化を継続的に検討する。さらに，地域で大切にされてきたものへの理解が，担い手の暮らしを支える仕事や、役割・対価・負担の取り決めにどう結びつくかを研究課題とする。その際，活動を続けることだけを望ましい結果とせず，関わり方や目的の変化にも目を向ける。

6　補足

6.1　矢印の根拠と解釈の範囲

実線は語り手自身が結びつけた関係，破線は語りと観察を筆者が照合・統合した関係を示す。実線も因果の実証ではない。以下では，語り・観察の内容と図の節点をつなぐ解釈を分けて示す。括弧内は修論本文の印刷頁である。

a　身体的経験 → 情動的同期

線種	破線
語り・観察の根拠	参与観察（草刈り人足・神祭・堆肥づくり等）と，B 氏のリズム合わせの語り「…リズムとか、波長に何も言わなくても合わせられるから。相づちだけでも。」（p.30）を筆者が照合。H 氏の事例でも，五感の共有が同期を生む場面を筆者が記述（p.58）
解釈の範囲	「情動的同期」は 2 章の理論語で，語り手の言葉ではない。B 氏の場面は会話であり，共同作業と同期を結んだのは筆者

b　情動的同期 → 関係レベルの自己像

線種	実線
語り・観察の根拠	B 氏「…リズムとか、波長に何も言わなくても合わせられるから。相づちだけでも。それは結局、村人って感じするじゃないですか。共同体的な。」（p.30）
解釈の範囲	語り手は 1 名。これを「関係アイデンティティ」として読むのは金（2021）に依拠した筆者の解釈

c　関係レベルの自己像 → 身体的経験（再び手を動かす）

線種	破線
語り・観察の根拠	I 氏は書類を手渡す交流が自分の喜びになり，再び喜ばれに行きたいと語る（p.59）／B 氏は自身の草刈りへの関与と，相互に作用する暮らしを語る（p.31）／E 氏は手を動かす活動・自ら企画する経験と，愛着の生成を語る（pp.42-47）。
解釈の範囲	実際の反復や関与の経過はある。ただし「関係レベルの自己像の変化が再度の身体的実践を生む」という節点間の関係は筆者の統合。I 氏の実践は手渡し・対話を含む。

d　語り・意味づけ → 風景／原風景の再解釈

線種	実線
語り・観察の根拠	A 氏「体験した後に文章に書いてあるものを読んで、これには価値があったんだ。って。」（p.22）／E 氏「進化の学校で西会津町とか西会津の風景を進化させていったら、ドローンっていうのが出てきて。」（p.45）
解釈の範囲	いずれも個人の経過として語られている。集落の語りが風景の見方を変えた，という集合的な水準は確かめていない

e　風景／原風景の再解釈 → 誇りと覚悟

線種	破線
語り・観察の根拠	A 氏「…環境問題解決のためのヒントがすべてあるじゃないか、ここにあるじゃないか。…それはなんかやりたいよね、それが軸です」（p.23）／E 氏「…見える風景が変わってきてから、この土地で楽しみたいとか。」（p.45）
解釈の範囲	個人の価値の捉え直しと関与の意思は語られている。「誇りと覚悟」という節点への統合は筆者の解釈。複数者による共有と個人の形成を区別する。

f　誇りと覚悟 → 語り・意味づけ

線種	破線
語り・観察の根拠	I 氏「本質は…元気になれた、自信を持てた。誇りを持てた、自分たちの半生に」「関心をもってくれてることが分かったから嬉しいんですよね。意味を生み出せた。」（p.59）／A 氏が絶望の後も楢山を探り，言語化を重ねた経過（pp.21-24）
解釈の範囲	I 氏の場面では，外から来た人が話を聞いたことが先にある。誇りが新しい語りを生む，という順序は筆者が並べた

g　越境者の〈生き方の違和感〉 → 共鳴保全マインド

線種	破線
語り・観察の根拠	各語り手が自分の違和感を語っている（pp.64-65 4.2.1）。C 氏「…ところが、A くんが来てから、だんだんだんだん変わっていったんですね。」（pp.33-34，芸術村に対する住民の見方について）
解釈の範囲	違和感が地域の共同規範を揺さぶり，編み直す，というつなぎは筆者の解釈

h　左ループ ≷ 共鳴保全マインド

線種	破線
語り・観察の根拠	B 氏はリズムを合わせられることと仲間への信頼を結びつけ，自身に「村人防衛マインド」が生じた経験も語る（pp.30-31）。C 氏は地域の常識を伝える集落の教科書を語る（p.35）。E 氏には，対立から協力へ関係が変わり，挨拶・約束などの作法を重視する経過がある（pp.47-51）。
解釈の範囲	経験と規範の結びつきを示す語りを，左ループ全体との双方向関係として筆者が統合した。「共鳴保全マインド」は筆者の呼称（修論注 9）。相手側の受け止めや排除の影響は未確認。

i　右ループ ≷ 共鳴保全マインド

線種	破線
語り・観察の根拠	H 氏「（土地を）自分でこうて、山へ行って木を切ってきて建てました。地元の人に手伝ってもらって」「…土佐山地域が守れないんですよ。守れないね。そうするためには人に来てもらう。それはやっぱり、ただ単にお金儲けだけじゃダメなんですね。」（pp.56-58）
解釈の範囲	原風景を守る覚悟から「守りながら開く」判断へ，という向きは H 氏自身が語っている。逆向き（規範が風景の意味づけを変える）は筆者の解釈

6.2　外部者の経験をどこまで確認しているか

ポスター⑦に関する資料を，経験を語る主体と資料の性質から区別する。

a　越境者本人の語り

資料	地域外での経験を携えて関わる語り手の語り。B 氏「ここだとやっぱり地域がすごく身体にあっていて、自分事化してる」（p.31），E 氏「…見える風景が変わってきてから、この土地で楽しみたいとか。」（p.45）
言えること	外から入った人が，関わりをどう経験したか
確認していないこと	語り手は実践の中核を担う人で，一時的な来訪者の経験ではない

b　住民が語った来訪者の反応

資料	I 氏「…子供や孫は聞いてくれずに東京に行ったのに、東京から来た人は聞いてくれるって自信になったんですね。」（p.59）※，C 氏「俺が「また来たい」って言う人が「ああ、ぜひここに来てくれ」って受け入れるだけで…」（p.35），E 氏「…みんな羨ましがってくれるんですよ。」（p.47）
言えること	来訪者の関心が，住民の側でどう受け止められたか
確認していないこと	来訪者自身が何を感じ，どう受け止めたか

c　筆者自身の参与観察

資料	修論写真 3-14 の説明「…筆者が結った縄が神社で使われることで身近で再訪したい場所に感情が変化をした。この活動で翌日の神祭本番に参加が許され、参拝をさせていただけた。」（p.60）
言えること	外から来た一人（筆者）が，共同作業を通じてどう変わったか
確認していないこと	他の来訪者の受け止め。筆者の共感的関与による偏りを含む

d　筆者の解釈

資料	修論 4.3.3(p.68)「外部の人びとにとっての憧れや尊敬の感情を呼び起こしていた」。4.2.3・4.3 の「またここに通いたい」「できる範囲で支えたい」は筆者の要約で，逐語ではない
言えること	解釈モデルの仮説
確認していないこと	来訪者本人の感情や行動を確認したデータとは扱わない。解釈は本節の a～c の資料に照らして検討する。

※ 修士論文本文（3.2.2③）では「東京から来た人は来てくれるって」と転記されているが，発言は「聞いてくれるって」であり，本資料では発言どおりに記した。

7　参考文献

修士論文で用いた主要文献

金倫廷（2021）．組織アイデンティフィケーション研究の新展開：関係アイデンティティとアイデンティフィケーションに注目して．『開発論集』108，65-76．
McGann, M.（2014）. Enacting a social ecology: Radically embodied intersubjectivity. *Frontiers in Psychology, 5*, 1321.
Merleau-Ponty, M.（1964）. *The primacy of perception*. Northwestern University Press.
長尾雅信・山崎義広・八木敏昭（2020）．地域間のプレイス・ブランディングにおけるマルチレベルの関係性への注目．『流通研究』23(2)，17-31．
Oldenburg, R.（1989）. *The great good place*. Paragon House.
Relph, E.（1976）. *Place and placelessness*. Pion.（高野岳彦・石山美也子・阿部隆訳（1999）.『場所の現象学』ちくま学芸文庫）
Ryan, R. M., & Deci, E. L.（2000）. Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist, 55*(1), 68-78.
髙野寛未（2026）．『幸福感に満ちた地域社会をめざす探索的考察：身体化認知アプローチ，Place Branding の視点を中心として』北星学園大学大学院経済学研究科 修士論文．
徳山美津恵・長尾雅信・若林宏保（2017）．地理学的視点を取り入れたプレイス・ブランディング・モデルの可能性：瀬戸内ブランドからの検討．『日本マーケティング学会カンファレンス・プロシーディングス』6，173-184．
Tuan, Y.-F.（1974）. *Topophilia: A study of environmental perception, attitudes, and values*. Prentice-Hall.（小野有五・阿部一訳（2008）.『トポフィリア：人間と環境』ちくま学芸文庫）
和田充夫・菅野佐織・徳山美津恵・長尾雅信・若林宏保（2009）．『地域ブランド・マネジメント』有斐閣．
若林宏保・徳山美津恵・長尾雅信（2018）．『プレイス・ブランディング：地域から”場所”のブランディングへ』有斐閣．

本発表で追加した文献（修士論文の提出後）

Eshuis, J.& Ripoll González, L.（2025）. Conceptualising place branding in three approaches: Towards a new definition of place brands as embodied experiences. *Journal of Place Management and Development, 18*(1), 61-79.
長尾雅信・山崎義広・八木敏昭（2018）．地域ブランド論における外部人材の受容の研究：中山間地におけるソーシャル・キャピタルの測定から．『マーケティングジャーナル』38(1)，92-107．
鈴木春菜・藤井聡（2008）．地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究．『土木計画学研究・論文集』25，357-362．